薬史レター

第90号

日本薬史学会　JSHP　2023年3月

日本薬史学会2023年度の主要行事のご案内

編集委員長　齋藤充生

来年度の日本薬史学会の日程について1月31日の常任理事会において、以下のとおり決定されました。多数の会員のご参加をお待ち申し上げます。

1．日本薬史学会総会・公開講演会の開催日について

開催日：2023年4月22日（土）
会　場：東京大学大学院薬学系総合研究棟
1）12：30～13：30　理事･評議員会(10階大会議室)
2）14：00～15：20　総会（2階講堂）
3）15：30～17：40　公開講演会（同上）

◯竹中登一先生
（元アステラス製薬会長、元日本製薬団体連合会会長）
「日本の創薬産学官連携60年史：私の経験」（仮題）

◯山本美智子先生
（元昭和薬科大学臨床薬学教育センター長、熊本大学・東京理科大学客員教授）
「薬のリスクコミュニケーションの過去・現在とこれから～患者中心の医療を目指して～」（仮題）

費　用：公開講演会（非会員も参加できます）は資料代500円を当日お支払いください。

なお、コロナの状況等により予定変更の可能性がありますので、最新情報は学会HPでご確認ください。懇親会の予定はありません。

2．柴田フォーラムの開催日について

未　定：コロナの状況を見て対面開催を予定しています。
会　場：東京大学（予定）

3．日本薬史学会 2023年会（岡山）の開催日について

日　時：2023年10月28日（土）　10：00～
年会長：土岐隆信（マスカット薬局顧問）
会　場：就実大学S館（岡山県岡山市中区西川原1-6-1）
詳細は本紙記事をご覧ください。

日本薬史学会２０２２年会（宮城）の報告

年会長　江戸清人（前エコー電力ビル薬局顧問）

COVID-19（コロナ）の影響で、本学会も2020年会は1年延期、そして、2021年会（千葉）のOn Lineでの開催があり、2022年会は、対面、On Line、ハイブリッドのいずれの方式で年会を開催するか悩みました。基本的にコロナも3年目に入り、感染対策もこの3年間進化しました。また、夏のコロナ第7波を感染患者数のピークと推定、11月初旬は第7波と第8波の間で感染者数が底になる（コロナの小康状態）と推定、対面で年会を実施することを決断しました。コロナ以前の年会は、①年会、②理事・評議委員会、③懇親会、④『薬史ツアー』により構成されていました。宮城の年会では、この4項目全てを対面で復活できないかと考え準備しました。しかし、結果的に③の参加者の懇親会は中止せざるをえませんでした。

1．年会報告

11月5日（土）の参加者は87名（会員49名、非会員32名、学生6名）でした［参考まで、登録者数は55名（会員39名、非会員14名、学生2名）］。午前中は特別講演［アンジェス株式会社代表取締役 山田　英氏：我が国のベンチャービジネス、医薬品を例に、現在と将来］、一般口頭発表４題が発表されました。

そして、昼食時間中に理事・評議委員会が開催されました。

午後は特別講演・市民公開講座［東北大学名誉教授、日本国史学会代表理事 田中英道氏：縄文時代の変換 日本史が変わってきている――古代史のエビデンスが蓄積］が行われ、9名の市民も参加しました。その後、一般演題口頭発表が４題、そして一般演題ポスター４題の発表が続きました。さらに一般演題6題が口頭発表されました。発表演題数は合計20題（一般演題18題）です。終始活発な討論が行われました。最後に次回年会長土岐隆信先生（マスカット薬局顧問）のご挨拶がありました。

2．『薬史ツアー』報告――東日本震災遺構／多賀城跡／日本三景松島 瑞巌寺

2日目の６日（日）は朝から『薬史ツアー』を行いました。天気にも恵まれました。大型観光バス1台で28人の参加者を得て、新型コロナウイルス感染の対策（検温、３密回避、バス内食事・お酒なし、換気）を十分考慮しました。ツアー実行委員会からの説明に加え、ツアー参加者からのお話も交え終始和やかにツアーは行なわれました。

最初に、東日本大震災遺構、仙台市立荒浜小学校に向かう途中、仙台市ご出身の薬学の巨人、清水（長尾）藤太郎先生の生家のあった付近（旧奥羽街道・旧国道）を通り、清水先生の通われた現存している仙台市立南材木町小学校（旧尋常小学校）を右左にと車中見学しました。藤太郎先生の暮らした明治中期は自然の豊かな地域でした。現在は、近くにタワーマンションも立ち並ぶ近代市街に変貌していました。震災遺構仙台市立荒浜小学校では震災当時の住民、行政などの証言などをまとめたビデオを見て、津波の恐ろしさを肌で感じました。また、実際に震災の当時そのまま残っている教室も見学しました（**写真１**）。次に、多賀城市の東北歴史博物館で、多賀城の歴史、出土品、ビデオ鑑賞、多賀城政庁の模型など見学しました。次いで、多賀城跡に移動、参加者を2グループに分け、ツアーガイド2名により、日本三古碑の1つ「多賀城碑」、そして多賀城政庁跡（**写真２**）を見学しました。多賀城は平城宮跡（奈良県）、大宰府跡（福岡県）とともに日本三大史跡の一つでもあります。古代東北の政治・軍事・文化の拠点でした。古（いにしえ）のみちのくを感じました。

日本三景松島に移動、お食事処”浪漫亭“にて昼食をはさみ、伊達政宗公が再建した松島五大堂（**写真３**）、そして、慈覚大師の創建、伊達政宗公の菩提寺でもある奥州随一の古刹、桃山様式の瑞巌寺（本堂、庫裡［くり］：国宝）をツアーガイド付きで見学しました。その後１時間程度の自由散策を経て、仙台駅東口に戻り17時30分ごろ、解散、ツアーも無事終了となりました。

写真１．震災遺構：仙台市立荒浜小学校の見学

写真２．多賀城跡の見学

写真３．日本三景：松島・五大堂の見学

日本薬史学会2023年会（岡山）のご案内（その１）

日本薬史学会2023年会（岡山）
年会長　土岐隆信

本年10月28日（土）に岡山市にあります就実大学を会場として日本薬史学会2023年会（岡山）を開催いたします。副年会長の洲崎悦子先生（就実大薬学部教授）、実行委員長の二宮清文先生（就実大学薬学部教授）と共に、この岡山におきまして初めて日本薬史学会年会を開催できますことを、大変光栄なことと思っています。岡山は医薬関係については緒方洪庵、岸田吟香、宇田川家、箕作家など古より多くの先人を輩出しています。また備中売薬（配置薬）の歴史があり、ハッカについては日本における大規模栽培の発祥の地でもあります。そこで本年会では、特別講演Ⅰを、岡山を代表する洋学に関する資料館である津山洋学資料館名誉館長の下山純正氏に「諸学問の源泉　津山の蘭学：宇田川家三代と箕作家一族を中心に」と題して、岡山における薬学史・医学史を含んだ洋学の発展についてご講演いただきます。さらに、特別講演Ⅱとして塩野香料株式会社の塩野秀作氏による「大阪道修町における香料の取扱いの歴史と塩野香料」を予定しています。一般講演として、口頭発表およびポスター発表を行いますので、多くの会員の皆様のご発表をお待ちしています。今後の新型コロナ感染拡大の状況にもよりますが、懇親会も予定しています。

翌日10月29日（日）には「薬史ツアー」を計画しています。岡山県北にあるため、なかなか訪ねることが難しい「津山洋学資料館」、「箕作阮甫旧宅」、「つやま自然のふしぎ館」、「津山まなびの鉄道館」等の見学を計画しています。

「津山洋学資料館」では下山氏の特別講演に出てくる展示品等を十分に堪能して頂き、「つやま自然のふしぎ館」では膨大な動植物、鉱物などの標本を楽しんで頂く予定にしております。

「晴れの国」岡山といわれるように晴天が多く、温暖な気候で果物など多く産します。会場である就実大学から徒歩10分の距離にあります岡山城は昨年11月に大改修が終わったばかりで、堂々とそびえており、その隣りは日本三名園の一つ後楽園です。このご来岡を機会に倉敷や吉備路などにも足を伸ばし、マスカットなどの果物や瀬戸内の新鮮な魚など秋の岡山を楽しんで頂ければと思います。

なお、参加申込み、発表等の詳細につきましては、5月頃日本薬史学会のホームページにてお知らせする予定です。

皆様のお越しを楽しみにお待ちしております。

（令和5年1月22日現在）

日本薬史学会主催
日本薬史学会2023年会（岡山）

◇学会　開催年月日 令和5年10月28日（土）
会　　場：
就実大学　S館（岡山市中区西川原1-6-1）
アクセス：JR西川原駅（徒歩1分）
JR西川原駅は、岡山駅から1駅4分（山陽本線または赤穂線）
タクシー岡山駅から約15分　約1000~1200円
予　　定：特別講演Ⅰ、特別講演Ⅱ、一般口頭およびポスター発表

◇薬史ツアー　開催年月日 令和5年10月29日（日）
津山洋学資料館、箕作阮甫旧宅、つやま自然のふしぎ館、津山まなびの鉄道館

日本薬史学会2023年会（岡山）
実行委員会メンバー及び事務局

・年　会　長：土岐隆信（マスカット薬局顧問）
e-mail: ttoki@mx1.kct.ne.jp
・副 年 会 長：洲崎悦子（就実大学薬学部教授）
e-mail: etchan@shujitsu.ac.jp
・実行委員長：二宮清文（就実大学薬学部教授）
e-mail: ninomiya@shujitsu.ac.jp
・大会事務局
就実大学薬学部内
「日本薬史学会2023年会（岡山）事務局
〒703-8516 岡山市中区西川原1-6-1
TEL 086-271-8442
FAX 086-271-8320（薬学事務室）
e-mail: ninomiya@shujitsu.ac.jp

中部支部だより

令和４年度日本薬史学会中部支部例会開催

中部支部長　河村典久

日　時：令和5年2月25日（土曜日）午後2時～5時
場　所：名古屋市立大学医学部内
脳神経科学研究所5階
〒467-8601　名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1

議　題：・八代監事の逝去に伴う中部支部役員等の更新について
・仙台での薬史学会2022年会の報告
講演会：①奥田潤先生『未来薬学試論』　他

六史学会講演報告
生薬ハンゲの修治に関する薬史学的研究

日本薬史学会評議員　牧野利明（名古屋市立大学大学院薬学研究科生薬学分野）

この講演は、筆者らの論文の内容[1)]をもとにしたものである。

ハンゲは、日本薬局方では、サトイモ科カラスビシャク *Pinellia ternata* の塊茎を基原とする生薬と規定されている。ハンゲをそのまま内服すると、咽喉部に強い刺激痛が生じる。よく誤解されることだが、この刺激痛のことを「えぐ味」と表現されることがあるが、「えぐ味」とは「苦味，収れん味を中心とする好まれない味，不快味。例えばタケノコ，山菜などによく認められる。」[2)]であり、刺激痛とは異なる感覚である。

中華人民共和国薬典（以下、中国薬典）ではハンゲは毒薬とされ、必ず減毒のために修治しなければならないことになっている。修治されたハンゲには、現在の中国薬典には、法半夏、姜半夏、清半夏（それぞれ、石灰水と甘草煎液、生姜煎液、ミョウバン水で処理）の三品目があり、2005年までの中国薬典には、さらに半夏曲（半夏麴、半夏麹；ハンゲ末を生姜煎液などとともに発酵させ、餅状に固めて乾燥させたもの）が規定されていた。

一方、現在の日本では、ハンゲは毒劇薬ではない普通薬として管理されている。この日本と中国の違いは、歴史的にどのように生じたのであろうか？

中国大陸での本草書、医方書の記述の推移

ハンゲを減毒のために加工するという記述は、『金匱玉函経』（後漢代）が初出で、湯で十数回、洗浄するという方法であった。その後、『肘後備急方』（晋代、341頃）に生姜を使う方法が初めて記述され、『本草経集注』（南北朝代，536）では「用之必須生薑」とあり、生姜を補料として修治することが必須とされた。

その後、『千金翼方』（唐代、682）では、生姜だけでなく、白辛子、酢、酒なども補料として使うことが示され、『太平惠民和剤局方』（宋代、1085）で初めて生姜汁、ミョウバンを使用した半夏曲が記載された

『本草綱目』（明代、1578）では、目的に応じて補料を変えた半夏曲を用いる事が記載され、『本草備要』（清代、1694）では、補料が異なる10品目の半夏曲が提示された。

ところで、明代前版までの本草書におけるハンゲの薬性は、修治前が微寒、修治後が温であったが、それ以降は修治の有無の記載なしに温とのみ記載されるようになった。このことから、明代からハンゲを修治せずに使用する事がなくなったことが推測された。

日本の本草書、医方書での記述の推移

日本でのハンゲを修治して使用する事の初出は『有林福田方』（1363）で、生姜を補料として使用していた。『和名集並異名製剤記』（1623）から半夏麹（半夏曲）が登場した。

その後、『一本堂薬選』（1738）では、ハンゲを湯液として調製すると刺激痛が生じなくなることが明記され、修治をすることで薬効が低下することから修治は不要とした。吉益東洞の『薬徴』（1771）でも、毒を恐れるべく生姜で加工することは、返って薬効

を失わせるので、修治すべきではない、とした。

日本の漢方医学は吉益東洞の影響が強く、陰陽五行説などの伝統的な知識に基づく教条主義を避け、実証主義を採用してきた。このポリシーの違いが、日本の漢方医学と中国での中国伝統医学（中医学）におけるハンゲの修治方法にも反映していると考えられた。

参考文献

1）Liu Y, Ota M, Fueki T, Makino T. Historical study for the differences of processing of *Pinellia ternata* tuber between China and Japan. Front. Pharmacol. 13: 892732, 2022.

2）野口忠，他，栄養・生化学事典．朝倉書店，東京，2009.

西欧薬史学補講（1）

辰野美紀

2022年の末に日本薬史学会の編集によって、『薬史学入門』（薬事日報社刊）が出版された。私は、第一章通史の2. 西欧の薬学の歴史（p.36 ～ p.50）を担当したが、紙幅の関係で紹介できなかった幾つかの部分を補講として追加したいと思う。

その１　(p.39) 12 世紀ルネッサンス

1927年、アメリカの中世史家、Charles H Haskinsが『The Renaissance of the Twelfth Century』を刊行する以前は、西ヨーロッパの中世という時代は概ね暗黒の時代と理解されていたと言ってもよい。ハスキンスはこの著作の中で、西欧中世時代特に12世紀は、様々な面で新鮮な活力にあふれた時代であったことを明らかにした。例えば、十字軍の遠征、都市の勃興、商業の発展、封建制と最初の官僚国家の成立、ロマネスク美術の展開とゴシック建築の芽生え、ローマ法の復興、ギリシャ科学や哲学のラテン語翻訳による復活、アラビア科学の紹介、大学の創設と知識人の誕生、各国語文学の発展、新しい音楽理論の導入などがみられたことから、この時代を12世紀ルネッサンスと定義した。1970年、東京大学の科学哲学・科学史家の伊藤俊太郎は、「12世紀ルネッサンスと西ヨーロッパ文明」という論文を発表し、その中でこの12世紀ルネッサンス時代の「ギリシャ・ヘレニズム科学とイスラム科学との文化遭遇・文明移転」に特に焦点を当てた研究を深化させた。膨大な文献と写本の解析から明らかになったことの要旨を纏めてみよう。まず、ギリシャ・ヘレニズム科学の伝播は、東西ローマ帝国が分列した後、ギリシャ語とギリシャ正教を核として建国された東ローマ帝国、すなわちコンスタンティノープルを首都とするビザンツ帝国に引き継がれてゆき、ギリシャ科学の最も高度に発展した良質な原書類はエジプトのアレキサンドリア等から移送され、その集積地に巨大な図書館が建てられた。そこに集められた専門文献は、紀元前3世紀から紀元後2世紀ごろのユークリット、アルキメデス、プトレマイオスなどに代表されるギリシャ科学研究の成果である。また、ビザンツ文化圏へと伝達されたギリシャ科学は、この時代より以前のプラトンやアリストテレスの自然学も含まれている。その後5世紀から7世紀ごろシリア文化圏ではビザンツのギリシャ語学術がシリア語に翻訳されていった。一方東ペルシャは元来伝統的な天文学や自然科学を中心とする学術の盛んな地域であったが、8世紀、アッバース朝の首都となったバグダッドに多くの学者や医師等を招聘してアラビア独自の科学、特に錬金術・化学・医学・薬学等の学術と実験の興隆を奨励した。更にバグダッドに建てられた「知恵の館」では、8世紀から9世紀にかけてシリアヘレニズム科学文献のアラビア語翻訳、同時にギリシャ語の原書からの直接アラビア語翻訳事業が大々的に行われ、それら翻訳された学術文献が大量にアラビア文化圏に移入することによってギリシャ科学は、アラビアに受け継がれたとともにアラビア科学においてもそのヘレニズム化によって大いなる精緻な学問、技術としての発展を遂げることになった。ギリシャ語原典からアラビア語直接翻訳の中には、ヒポクラテスの『人間の自然性について』やディオスコルデスの著書も含まれていた。アラビア科学は、11世紀のアラビア最大の哲学者であり医学者であるイヴン・スィーナー（アヴィセンナ）の時代には黄金期を迎えることになった。それらア

ラビア科学およびそのヘレニズム科学とギリシャ哲学・科学の膨大な成果は、11世紀中葉からスペインのやトレドやシチリアのパレルモに建てられた翻訳センターで次々とラテン語に翻訳され、西ヨーロッパに移転され、忘れ去られていたギリシャ哲学・科学と未知のアラビア科学が12世紀に西ヨーロッパで一斉に開花することとなった。この科学・文明の大変革を「12世紀ルネッサンス」と呼ぶ。

「海外の薬史学会の今（10）米国」

国際委員会　孫　一善

2021年の米国薬史学会（American Institute of the history of Pharmacy; AIHP）の活動は、戦略的優先課題選定・研究支援・歴史的コレクション・プログラミングなどに要約される。

一昨年、AIHPの理事会と学会スタッフは,今後3年間の戦略的優先課題として、(1)AIHPの歴史的コレクションにアクセスしやすくすること、(2)AIHPの営業収益（operating revenues）を年間5万ドル以上増やすこと、(3)薬学・製薬・歴史関連組織との協力体制を構築すること、(4)AIHPのプログラムと運営のあらゆる側面において、多様性・公平性・包括性（diversity, equity, and inclusion）を統合し促進すること、の4点を選択した。

2021年、AIHPは歴史的コレクションを利用しやすくするために、コレクションスタッフを増員し、コレクションの説明文の作成・画像のデジタル化にも取り組み、オンライン・デジタル・ライブラリー（online digital library）プラットフォームにアップロードを進めている。特に歴史的コレクションやオンライン化・デジタル化の基礎基盤を着実に築いており、具体的な例として、2021年12月に、ウィスコンシン州と米国各州の大麻の変遷に関するオンライン展示「Contested Cannabis」（A History of Marijuana in Wisconsin and wider world）を開催した。

AIHPは薬学の歴史に関する知識や理解を深めた研究活動に対しても、各種研究支援を行っている。学会の出版物としてジャーナル「Pharmacy in History」の最終号を発行（以降「History of Pharmacy and Pharmaceuticals」に名称変更）、電子ニュースレター「e-Scripts」も年4回発行している。リーダーの交代も行われ，2年間のAIHP会長の任期を終えたW・クラーク・リッジウェイの後任に、ワクチン学者・薬剤師・疫学者であるジョン・D・グラベンスタイン博士が就任した。

東京大学薬学図書館展示
「中国伝統医学に見る薬学：『黄帝内経素問』と『本草綱目』」

評議員　飯野洋一
東京大学薬学図書館　鈴木剛紀

東京大学薬学図書館では2022年度第2回展示「中国伝統医学に見る薬学:『黄帝内経素問』と『本草綱目』」を2023年1月17日から3月16日まで開催している。

今回展示している『黄帝内経素問』と『本草綱目』は、2021年に東京大学大学院薬学系研究科天然物化学教室から寄贈を受けたものである。（寄贈の経緯は参考資料に挙げた志茂将太朗氏の報告をご参照されたい）

いずれも中国の伝統医学、薬学（本草学）を代表する文献として知られ、日本でも広く普及した。今回の展示資料は江戸期の日本で刊行されたものと考えられる。

ともに史料的価値が高く、入手困難な稀覯本であるが、寄贈時点では劣化損傷が多くみられる状態であった。表紙、本文には虫損、折れ、綴じ糸のほつれ、切れが見られ、題箋、見返しには糊離れが生じ、角裂は欠失している状態のため、早急に高度な技術で修復を行う必要があった。

そこで2021年10月、公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団に助成金の交付を申請し、2022年3

月、同財団にて助成金の交付申請が採択され、資料保存対策費として100万円の助成を受けることができた。これにより、同年4月株式会社資料保存器材に修復を委託した。

同社で資料表面の塵、埃を除去した後、虫損箇所、欠損箇所は和紙とデンプン糊を用いて修補した。また、丁を揃えて本体を紙縒（こより）で綴じ直した後、表紙と合わせて新規の絹糸で綴じ直し、題箋、見返しの糊離れの箇所には糊を差して貼り戻し、欠失した角裂はデンプン糊で新たに取り付けるなどの処置を施した。さらに、資料の形態に応じて保存容器を作製・収納し、保存容器の背面に資料名を印字した中性ラベルを添付して、6月納品された。

こうして資料を公開する条件が整ったので、展示準備を進め、2023年1月17日から開催する運びとなった。詳しい展示内容は、東京大学薬学図書館のウェブサイトに展示の図録を掲載しているので、そちらをご参照いただきたい。（http://www.lib.f.u-tokyo.ac.jp/tenji_kouteidaikei_2022/）

展示初日の1月17日以降、薬学系研究科・薬学部教員・学生、日本薬史学会役員、学内の図書館・室職員、学外の利用者などが展示見学のために来訪され、2月21日時点で学外からの来訪者は15人である。会期末の3月16日までに学内外の多く方々の来訪が期待される。

どのような貴重な資料であっても公開され、利用に供しなければ「死蔵」のまま終わることになる。その所蔵する資料を公開し、研究に資するものにすることは、図書館の重大な使命の一つである。今回の展示を契機として中国伝統医学や本草学への理解と関心が深まることを望んでやまない。

今回の展示に当たって、資料の修復のために多大なるご支援をいただいた公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団、株式会社資料保存器材の関係者の皆様と、展示の準備にご協力いただいた志茂将太朗氏に、この場を借りて感謝申し上げます。

参考資料

志茂将太朗．研究室に眠っていた資料～中国本草書和刻本と明治期教科書写本～．薬史レター　2022；88：8

〔Book紹介〕

新村拓著

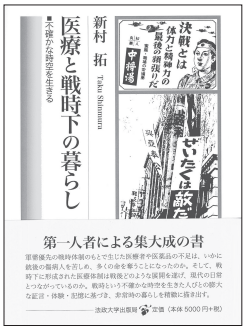
「医療と戦時下の暮らし　不確かな時空を生きる」

四六判／582頁5000円（法政大学出版局）

謹呈シールに「御書評頂ければ幸いです」と糊付けされた本書が学会誌刊行センターに届いた。著者は、1946年出生され、筆者も同年誕生した縁もあり Book紹介を引き受けさせて頂いた。

本書の帯には、「軍需優先の戦時下体制のもとで生じた医療者や医薬品の不足は、いかに銃後の疾病人を苦しめ、多くの命を奪うことになったか、そして、戦時下に形成された医療体制は戦後どのような展開を遂げ、現代の日常とつながっているのか。戦時という不確かな時空を生きた人々の膨大な証言・体験・記憶に基づき、非常時の暮らしを精緻に描き出す」と記されている。

目次には、**第一章**（3～83ページ）統制に翻弄される薬業界と消費者、**第二章**（85～201）疲弊した医師激変する戦後医療、**第三章**（203～300）体力増進と人口増加に注力した総力戦、**第四章**（301～353）結核と梅毒を拡散させた貧困と戦争、**第五章**（355～406）徴用の不足を補う学徒勤労動員、**第六章**（407～481）防空法制下の不自由な暮らし、**第七章**（483～520）建物疎開と学童集団疎開、**第八章**（521～540）熱帯医学と検疫と進駐軍、**第九章**（541～576）予防薬と流行薬より構成される。



「あとがき」には、「母は、1940年（25歳）に結婚、長男疫痢で死去（4歳8カ月）、次男生後1か月で病死、薬を探し求めて苦労、その後三男の兄と四男の私が生まれているが、私のほうは乳が飲めず、栄養

失調で死にかかっている。母が繰り返し語っているのは救えなかった命のこと、薬・食糧・住まいといった生存に直結する物資の圧倒的な不足であった。」と悲惨な思い出が記されている。

筆者は、戦後医療・福祉に重くのしかかった結核（316 ～ 322）、兵士とその家族が負った重荷（322 ～ 327）、毒ガス製造で被った障害（384 ～ 386）、渡航に必須の予防注射、国内に広がる熱帯病（526 ～ 530）、検疫と DDT（530 ～ 540）、防疫の核とされた予防注射と鼠・昆虫等駆除（541 ～ 548）、チフスに必要な予防注射とシラミ退治（558 ～ 564）、神経衰弱に効くというホルモン剤（565 ～ 567）、栄養失調・疲労・生活不安を慰めたビタミン剤（567 ～ 570）、虫下しが欠かせない生活に国産サントニン（571 ～ 573）が印象に残った。

お礼のメールを送ったところ、本書では、日本薬史学会編『日本医薬品産業史』を含め８箇所（56、66、71、77、83、321、540、570）にて注記したこと、また、『売薬と受診の社会史　健康の自己管理社会に生きる』（法政大学出版局）においては、多くを引用しており、大変優れた論文の多いことに感動させられましたとの返事を先生から頂いた。

新村拓（しんむら　たく）博士は、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。1990年「古代医療官人制の研究」で文学博士。京都府立医科大学医学部教授、2001年北里大学一般教育部教授。副学長をへて2012年退任、名誉教授。

日本医史学会の元理事で、現在は功労会員。「日本薬史学会とは、六史学会合同発表会で触れ合うだけで、個人的にも知り合いがおりません」とのことでした。

お互い湘南の地に住んでおり、コロナ禍が収束したら是非お逢いしたいと願っているところである。（2022/12/6）　**（森本和滋）**

〔寄贈書紹介〕

正倉院薬物を取り巻く世界

常磐植物化学研究所顧問で本会評議員の鳥越泰義氏の「正倉院薬物を取り巻く世界」を寄贈いただいた。2007年から2019年までの11回の臨床福祉ジャーナル（最終号は敬心・研究ジャーナル）への同タイトルの連載をまとめたものである。博覧強記の筆者が奈良だけでなく、長安（西安）、洛陽などへの現地調査と資料を駆使して、正倉院の時代の世界観を仏教、道教から後世の安倍晴明の陰陽道に至るまでわかりやすい文章と図表で縦横無尽に解説している。入門としても、知識の整理・気づきとしても、参考資料のリストとしても有用であり、現地の現状を知るガイドブックとしても秀逸である。現地写真は修理中、発掘中などのその時点でしか得られないものも含まれている。2021年の総会講演・本レター87号のBook紹介の「毒が変えた天平時代―藤原氏とかぐや姫の謎」（船山信次著）の内容に加え、さらに深い理解に役に立つものである。残念ながら、本冊子は常磐植物化学研究所創業70周年記念事業会の発行で、限定配布とのことであるが、収載元の記事は「臨床福祉ジャーナル」（https://www.rinsho.jp/journal/）、「敬心・研究ジャーナル」（http://www.keishin-group.jp/keishin_fr/rdi/journal.html）から閲覧可能である。

（齋藤充生）

日本薬史学会編集委員会
編集委員長：齋藤　充生
編 集 委 員：赤木　佳寿子　小林　哲　武立　啓子

薬史レター 第90号　2023年3月

編集人：齋藤　充生　　発行人：森本　和滋
日本薬史学会　　The Japanese Society for the History of Pharmacy（JSHP）
〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16　（一財）学会誌刊行センター内　日本薬史学会事務局
tel：03-3817-5821　fax：03-3817-5830　e-mail：yaku-shi@capj.or.jp　https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください